
幸せな死に方

天宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せな死に方

【Nコード】

N3865A

【作者名】

天宇

【あらすじ】

世界大戦から500年、その傷跡が荒野という形で色濃く残っている世界。世界を旅する「ツバメ」と呼ばれ、この世界に自分の居場所を探す少年ギヴンと大好きな世界のために刹那を生き抜こうとしている少女フォートの、綺麗ごとを現実にする物語。

序＋その世界沸き立つ中に（前書き）

♪初めまして&こんにちは。そしていらっしやいです。

♪この物語はそのシナリオ上キヤラクターが死亡する場合があります（厳密には未定・・・；）苦手な方はブラウザバックをお願いします。

♪それでは拙い&序章の癖にやたら長い文章ですが、お楽しみいただければ幸いです。

序＋その世界沸き立つ中に

意地を信念に
祈りを決意に
想いを言葉に
綺麗事を現実

そんな風に今まで生きてきて
きつとこれからもそうして生きてゆくのだろう。

- - - - - 幸せな死に方 - - - - -

色とりどりの布が結わえられた紐が、建物と建物の間、つまり通路の頭上で揺れている。

本来なら馬車が二台は並べるだろう広いこのメインストリートに、今は両脇に所狭しと並べられた屋台と人々の所為で馬車はおるか真っ直ぐに歩くことだっただけ出来はしない。

この世界に唯一つだけ残った王のいる街・・・王都フィクス。

世界各地で催されている聖誕祭の、今日はその第一日目。

今日から二週間は世界の何処に行ってもお祭り騒ぎになっているはずだ。それは勿論王都から農村まで、村にすらなっていないような山奥の一軒家だったとしても、変わらない。

世界中の皆がこの良き日を謳い踊り願いまたこれからの一年を健やかに平和に過ごせるよう大神サークに祈る。

当然フィクスは王都と言うくらいだから祭りの規模の大きさといったら半端ではない。ギヴンはこの時期にフィクスに来たことを、心

の底から後悔した。

いや、心の底からという表現は実は正しくは無い。

この割れたような喧騒と町中に溢れた人の圧迫感ととにかく凄い熱気。煩くてきつくて辟易とはするけれど、それは人がいるという証だから。

人が今此処にいて、生きて、笑っている証拠だから。

「・・・でも歩きづらいのとそれとは関係ないんだよなっ・・・と、ふう・・・」

ようやくメインストリートから一步外れ、裏路地へ入るには至らない場所に小さな空白を見つけ、ギヴンは息をついた。壁に背中を預け座り込む。立っているのも辛かった。

裏路地の隣に店を構えた青年がそんなギヴンの姿を見て、からからと笑う。

「え、なに？」

「いやいや、とんでもない目にあってるみたいだな、坊主」

「坊主言うな」

青年は太陽みたいなきらきらした髪を雑に切って、後ろで一つにまとめていた。金茶の目が人懐っこく微笑み、ギヴンの傍にしゃがみ込む。

「今年は陽気にも恵まれたしな、年に一度のお祭りだし。お前王都は初めてかい？」

「え？」

店の方はいいのかな。

そんなことを考えて青年ではなく青年が今さっきまで立っていた箇所を見るともう一人女性がいるのが見えて、何だ一人ってワケじゃないのかと得心していたものだから青年の問いかけを聞き漏らしてしまった。けれど青年はギヴンの聞き直しを違う意味と取っただけ。

「ああ、俺らも一応商いやってるからな。人を見る眼ってのは嫌でも肥えるものさ——坊主、ツバメだろう？」

今度の問いは分かった。

「ん、まあ」

「・・・一人か？」

「うん」

「そっか」

青年は頷き、ギヴンの頭をその帽子ごといきなりガシガシと撫でた。それをみてギヴンはそっと微笑む。青年はツバメとの話し方をちゃんと知っている。

優しい人だと思った。

ギヴンは青年を見てその背後にふと目をやって、

「あ」

声を上げた。

「ん？どうした・・・」

「ソルう、ちよつとサボらないでよ」

「うおつと！」

青年は（ソルと呼ばれた、今）ギヴンが声を上げた原因、さっき話を聞いていなかった原因、その女性の声に文字通り飛び起きた。

真っ赤な髪を高く結った、綺麗な人。けれどその顔には「今怒つてます」とでかでかと書かれていた。

「悪い悪い」

「なに、可愛い子にちよつかい出してるの」

「いやいや」

誤魔化すように頭を掻くソルから目を外して、女性はギヴンを見た。

「あら、小さなツバメ。こんにちは」

一転鮮やかな印象を残す笑顔を向けられて、ギヴンは赤くなりながらお辞儀をして返す。女性はその仕草に微笑み、店の卓から林檎を一つとってギヴンに投げた。

「わ」

「その様子じゃまだ着いたばかりね？吃驚したでしょう、この盛況取り合えず・・・『果てを生き抜き今に出会えたことに感謝を』。

それは銭別よ、持って行きなさいな」

「え、あの、有難う。ええと、『昨日に出逢い未来にいるであろうその深き魂に安息を』」

「あらちゃんと知ってるのね、ツバメ君」

女性は口到手を当て、微笑む。

「ツバメじゃない」

「私からすればツバメはツバメよ。ごめんなさいね、ツバメには名前を聞かないことにしているの」

「や、それは普通」

苦笑して見せたギヴンに、女性はまた笑みを向ける。いつの間にか店で客と応対しているのはソルと呼ばれた青年になっていた。

「店いいの？」

「あいつにちよつとやらせようと思って。あいつもね、ツバメだったのよ。ほんの一ヶ月前にやめちゃったけどね」

「変な情報ばらすなよ」

しつかり耳はこっちを向いていたらしいソルは女性に非難の声をあげ、また客の応対に戻る。

そんな青年の姿が何故だか可笑しくて、ギヴンと女性は顔を合わせで吹き出した。

「じゃああいつも五月蠅くなってきたし、客商売に戻るわね」

「うん。それじゃあ」

ギヴンもそろそろ行こうかと思っていたところだ。立ち上がり軽く手を振って、裏路地の奥の方へ進む。今はちよつと大通りは勘弁だった。

この王都にはほんの小一時間前に着いたばかりだったけれど、いい人たちに出会えてよかった。揉みくちにされた甲斐があったというものだ。

「それにしても、小さなツバメだって」

思い出してギヴンは小さく笑った。

晴れ渡った空。砂混じりの風。

裏路地から抜け出て、メインストリートほどではないが活気に満ちている通りを歩きながらギヴンはつい先刻までいた世界を思い出す。昔の戦争の影響で何処まで行っても緑なんて無い。

木々は枯れ草花は綻び水は濁り大地は掠れる、そこは死の世界。荒野。

生物兵器の影響といわれる変異体、魔獣が闊歩し人に死を運ぶその荒野を生きる者たちをツバメという。ただしその名は本来蔑称だった。定住し人との間で生きることの出来ない、環境の変化に耐えられない者たち、と。

今でこそそれは過酷な世界で生きることの出来るものとして使われているけれど。

定住する者たちは翼を休めに来たツバメたちに言葉を送る。先ほどの女性が使ったものが、それだ。ギヴンの言葉はそれに対するもの。儀礼的なものだが、ギヴンは好きだった。

ふわりとまた、砂交じりの風がギヴンの後方へ抜けていく。後ろ髪を一房だけ伸ばしてうなじの辺りに赤いリボンで結んだそれが、風に遊ばれて踊る。

ギヴンが王都に着いて、一日目のことだった。

序＋その世界沸き立つ中に（後書き）

こんなところまで読んでくださって有難うございます。♪ 本当触りだ
けですがここまで序章です。

こんな感じにのんびり進む話ですが、今後ともよろしく願いしま
す。

1+その御伽話のような出逢い

「う、わ！」

ギヴンは思わず叫び、跳ねるように道の脇に避けた。それはギヴンだけではなくて、その道にいた人々共通の動作。

小さな、ギヴンとそう変わらない背丈の誰かが慌しく走り去っていた。薄紫の大きな布を頭から被り、それより色の濃い深い董色の髪を一房はみ出させて。

それだけなら別にこれと言って文句は無かった。なに急いでいるのかな、とは思ったけれども。

けれどそのすぐ後に大勢の大人が道に横に広がって走ってきた。結構凄いスピードで、それでギヴンたちは避ける羽目になったのだ。

明らかにそれは先刻走り去った誰かを追っている感じだった。

人々は良識を弁えない男たちに不平の言葉を漏らしたが、徐々に混乱は収まりまた祭りの賑やかさが戻ってくる。

そんな中空気に取り残されてしまったのはギヴンだった。

（走ってた・・・逃げてた？）

ギヴンは爪を噛む。何か悪いことをしたのだろうか、それで追いかけられていたのだろうか。

「おっ坊主じゃないか」

眉根を寄せていたところに突然背後から声をかけられて、ギヴンはまた吃驚することになった。

「えーと、昨日の・・・」

「ソル。何やってんだそんなとこで」

そう、昨日この街に着いたばかり、聖誕祭による人の多さに疲れて一休みしていたところに声をかけてきた青年だった。今日は自由時間でも貰ったのか、軽装で一人らしかった。

「うん、ちょっと気になることがあって」

ソルはギヴンの応えに、少年の視線の先を追った。

「何、さっきの集団？」

「ん。見てたんだ」

「まあな、目立つし。アレはやばい匂いがするな、関わらない方が」
「うん、やっぱり見てくる」

「っておい！？」

「じゃね」

ソルの言葉などまるで無かったかのようにギヴンは走り出す。だが
そうして2、3歩ほど行ったところでぐきり、と嫌な音を立てて首
が後方に曲がった。

「！！」

「あ、悪い思わず」

ギヴンの一房伸ばした後ろ髪を慌てて離して、ソルは誤魔化し笑い
をする。

「った、た・・・ソル！」

「悪かったって。いきなり走り出すと思わなかったんだよ。やけに
この髪は持ちやすいし」

「だからってなあ」

まだ首の筋がじんじん言っている。涙目で抗議し詰め寄ったギヴン
にソルは待て待てと手を振った。

「お前な、ツバメの癖に他人に首突っ込むなよ。しかもあんなやば
そうな連中」

「でも、気になったんだ。気になったのに、放っておけって言うの
か？」

「気になったって・・・、お前なあ」

ソルはギヴンの身を案じてくれているのだろう。昨日初めて、それ
もほんの何分か会っただけの自分にどうしてそんな風にしてくれる
のか、ギヴンにはむしろそっちの方が不思議でなかった。

「ソル」

まだ延々と危ないと連呼している心優しき青年に、最大限の感謝と
拒絶の意味を乗せて名を呼んだ。その響きに青年の呟きが止まる。

「ありがとう。でも、行きたいって俺が思ったんだ」

何がしたいのではなく、ただ行きたいと。そう告げる少年に、青年はこの目の前の小さな存在は確かにツバメなのだと理解する。

弱くて儂くても、自分の足で行く者たち。自分はそうあり続けられなかったけれど。

ため息一つ。

「この街は初めてか？」

「ううん」

「じゃあやばそうになったらA地区まで何とかして来い」

「え？」

「いいな、A地区だぞ」

両手を腰に当て半ば睨むように見た青年は、ギヴンにそう強調し踵を返す。

「あ・・・」

ギヴンはその意外に広い背中を見詰め、青年の意図を図る。
やがて。

「ありがとう！」

小さくなっていく背中に声をかけ、ギヴンは走り出していた。

王都はメインストリート周辺は整備されて美しい景観を持っているが、王宮から遠ざかる、すなわち郊外に近づくにつれ蜘蛛の巣のような構造になっていく。ギヴンはその人気の無い道を走っていた。

「曇ってきたな・・・」

ふと空を見上げて呟く。先刻までは青空が広がっていたのだが、いつの間にか鈍色の雲が青を食らっていた。

ギヴンはそんな中を迷うことなく走っていく。勘、ではなかった。確信。足音は確かにこの先から聞こえてきている。

勿論常人には聞こえない小さな音だ。音にもなりきれない振動と言っている。けれどギヴンには聞こえていた。

「この耳が役立つなんて、な——」

不意にギヴンは自嘲めいた笑みを浮かべる。決して穏やかではない、悲しい笑み。

「とにかく、先回りしないと」

ただ走る。考えなくてもいいように。

どれだけ道を行っただろうか、雲の所為かスラムに近くなった所為か、どんよりとした空気と暗い道にギヴンはいた。立ち止まり、周囲に意識を向ける。

「来た」

建物の間に体を滑り込ませ、それを待つ。幾許かの時を挟んで、

「！」

紫の布がはためいた。ギヴンは半身を道に出し、その誰かを見詰める。

「・・・」

誰かは思わずといった風に立ち止まる。こんな場所に人がいるなどと思わなかったのだろう。

「どうしたの？」

ギヴンは問いかける。誰かの肩がぎくりと震えた。

「追われているの？」

ギヴンは誰かに一步を踏み出す。誰かは逃げはしなかったけれど、困惑はしているようだった。

「おいで」

強い、言葉。誰かは息を呑み、数瞬身じろぎした後走り出した。ギヴンは誰かの手を握る。細い手。多分女の人。

「こっち」

小さくて短い言葉でギヴンは少女に語りかける。少女は何も言わず、けれどしっかりと歩調でギヴンに手を引かれたまま走った。後方から複数の足音。さっきの男たちだろう。

「凄いいつこさだね、結構逃げてるでしょ？」

「ええと、はい・・・」

細い声。やっぱり女の人だ。

「うーん形成的にはやっぱり女の人を応援しちゃうよなあ」

「そう、なんですか？」

「むさい男よりは可愛い女の子の方がいいって断然・・・こっち！」
軽口を叩きながら少年は少女の手を引き、丁字路を右に曲がった。

「え!？」

隣で少女の息を呑む声。そこは袋小路だった。すぐに男たちが追いついて、二階建ての建物を背後に立つ二人を見やった。少女は酷く息が乱れていたが、気丈に男たちを睨む。袋小路に入ってしまったギヴンをまるで責めようとしないう少女に、ギヴンは心なし吃驚した。同じく息を切らした男たちが間合いを詰めてくる。その中の一人が口を開いた。

「お戻りくださいフォート様、どうか」

（様? どうか?）

目を見開いたギヴンは未だ繋がれた手が強く握られたことにまた戸惑った。

「ごめんなさい、私・・・」

少女のギヴンの手を握る強さが増す。それにギヴンは頷いた。

「話は決裂しそうだけど、続ける？」

不適に発したその言葉に、先ほどの男がギヴンに目を向ける。

「お前は・・・」

「いやなんか気になって。取り合えず俺としてはこっちに加担したいなー、何て思ったり思わなかったり？」

「貴様!」

ギヴンはそう笑うと、ふわりと少女を抱き上げた。少女は短く悲鳴を発するが、ギヴンはそのまま後退する。そして、

「しっかり掴まって？」

少女の耳元に囁き、返事も待たずに跳躍した。

「っ、きゃ、ああ!？」

案の定少女は叫ぶ。仕方ないなあとギヴンは苦笑した。

その一足で建物の屋根までをいとも簡単にギヴンは上って見せた。その跳力は常識を超えて、人外。

ポツリと頬に冷たいものを感じて、ギヴンは空を仰ぎ見る。

「やっぱり降ってきた」

下を見ると、男たちがまだ啞然としてこちらを見ていた。

「じゃーね」

そのギヴンの言葉に正気に戻るも、そのときにはギヴンは踵を返していた。少女を抱えたまま、屋根を渡り走る。少女はその状況に何とも思わないのか単に頭がそこまで回らないのか、ギヴンの首にしっかりと掴まっていた。

・・・実は案外、高所恐怖症なだけかも知れない。

「ん、そーだ。A地区に来て言われてたっけ」

ふと呟いた声に、ようやく少女は顔を上げる。被っていた布が零れて、その顔が覗いた。

菫色の細い髪に緑の鮮やかな瞳を持つ少女は、単純に美しいと思った。

「あの、有難うございます」

「んー？わからないよ、お礼言うのはまだ早いつて。俺が何者かも分からないのに」

茶化して言えば、少女は微笑む。それは酷くぎこちなかったけれど。

「いいえ、貴方が何者かは関係ないのです。この後私がどうなると言つてもそうなることを選んだのは私自身ですから」

「そこまで覚悟して手握ったんだ？」

「ええ」

「・・・なまえ」

「え？」

「名前、聞いてない」

ギヴンは前を見続ける。だから少女が今、どんな顔をしているか知らなかった。

知りたくなかったのかも、しれない。

やがて少女は口を開く。

「フォート。フォート・ナレッヂと申します」

雨足は段々と強くなっていくようだった。

1 + その御伽話のような出逢い（後書き）

ということで、フォート登場。

此処から物語は動き出します。・・・予定です（おい！）

2 + 仏頂面の陰に微笑み

聖誕祭は、この世界の初めを祝うお祭り。

今から500年前、人間は酷い戦争をした。

その戦争は全ての人間を飲み込み共存している動植物を殺し星を傷つけ勝者のいないまま終わった。現在ではそれは「終わりの戦争」と呼ばれている。

戦争はどうして起こったのか、どうしてこんなにもたくさんの悲しみを傷を残したのか。そんなことがどうでも良くなるほど、世界は生きているものにとって過酷な場所になった。

戦争で使われた兵器で世界はぼろぼろになった。

そんな中新しく「出来た」生物がある。

魔獣。

戦争で使われたとされる生物化学兵器。それを人間の戦争の巻き添えになって被った動植物の変異体。

彼らはまるで戦争の罪を忘れさせないために在るかのように、人間たちを集中的に襲った。

こうして人間は過酷な自然環境と魔獣の脅威にさらされて、細々と生きていくことになった。

聖誕祭は、この世界の初めを祝うお祭り。

この、過酷な自然環境と魔獣の脅威にさらされる世界の。

「来ても良いとは言ったがな」

「俺も来る気はなかったんだけど・・・」

しとしと、空が涙を零す。

それは多くも少なくもない量を零し、大地に溜まっていった。灰色の雲がふわふわと空を横切っていく。軽そうに見えて厚い雲らしく、今は辺りも大分暗くなっていた。

王都フィクスA地区、「ツバメのための店・リーフ」からその会話は流れてきた。ツバメとは勿論旅人のこと、そのための店とは武器や防具、薬草類を売っているいわゆるツバメ向けの雑貨屋のこと。床に水溜りを作り店主にしかめ面をさせているのがギヴン、腕を組んで小さな体をしかめ面で見ているのがソルだった。

ギヴンの後ろには紫の髪の少女、フォートが居心地悪そうに立っている。というより、ギヴンの後ろに隠れている。

この状況をもう一度見て、ソルはため息をついた。

「その子まで連れてきていいとは言っていないぞ」

「ごめん・・・」

ギヴンは愛想笑いをしながら謝る。それにまたため息について、ソルは店の奥へ引っ込んでしまった。ギヴンはちよつと慌ててその背中に声をかける。

「ごめん、あの、雨が止むまでその、もし良ければ雨宿りさせてもらっていいかな？止んだらすぐに出て行くから」

ソルがちらりとギヴンを見る。「あ、あの、やっぱり出てくよ。ごめんね」その視線が睨んでいるように見えて、今度は本当に慌てて手を両脇でパタパタと振り、ギヴンは店を出て行こうとする。

「馬鹿」

それが実行されなかったのは、ため息混じりに何処か諦めたように、ソルが短く呟いていきなり何かをギヴンに放ったからだだった。放られたものは、タオル。ギヴンはちよつと迷って、それと何も言わないソルを交互に見詰めて

「ありがとう」

微笑んだ。仏頂面だったソルは少し体裁を崩す。

「ずぶ濡れになってるガキ二人を追いつ出すほど俺は落ちぶれてねえぞ」

「うん」

「あ、有難うございます」

ギヴンが渡されたタオルをそのままフォートに渡して、フォートはギヴンとソル両者に頭を下げた。

「ほら。お前も拭け」

「わ」

もう一枚のタオルをソルはギヴンの頭に被せ、帽子ごとぐりぐりと拭き始める。その動作は荒っぽいけれど優しく、自然とギヴンは微笑んだ。

「ありがと、自分で拭くよ」

「おう」

暫く雑貨屋は沈黙が続く。ややあってソルが口を開いた。

「お前、帽子被ってるんだな」

「え？」

ギヴンの頭にはちょっと不恰好というか古いと言うか、それよりもまずギヴンの頭にサイズが合っていない帽子が乗っている。一見すると袋をそのままひっくり返して被っているように見える。

帽子は頭部の保護にも砂よけにもなるから、被っているツバメは多い。

「うん、そうだね。どうして？」

「んー、別に。にあわねえなあと思っただけ」

「うわ失礼発言」

「せめてもう少し小さいのにしたら？なあ嬢ちゃんそう思わないか」

「え？」

いきなり話をふられたフォートは目を丸くしてギヴンとソルを交互に見た。

「ええと、そうですね、ハイ、ええとその」

「・・・」

「いえ、あの、そうではなくて、ええと」

「・・・つく」

「え？」

鼓膜を震わせるその空気の漏れに、フォートはまた目をぱちくりとさせる。

「っははは！アンタなかなかいい味出してるよ」

「別に無理にフォローしてくれなくていいよ」

ソルは腹を抱え、ギヴンはぶすりと頬を膨らませる。フォートは何度も「え？」を繰り返し、自分が先ほどまるつきり挙動不審だったことに今更ながら気がついて、頬を染めた。

「そ、そんなに笑わないでくださいっ」

「いやいや悪かったよ」

まだ笑いの残滓を残しながらソルはフォートに手を振る。フォートは横にいるギヴン同様頬を膨らませたが、それを見て一つ頷き、ソルは手をパンと合わせた。

「さて、お前ら二人とも行くところあるのか？」

「ん、俺は特に無いよ」

「私は・・・」

「今出るとまずいんじゃないか？逃げてきたんだろ、嬢ちゃん」

「は、はい・・・」

ソルの言葉に幾分目を伏せてフォートは頷く。ソルは少女はそのままにギヴンを見た。

「昨日、もしかして野宿だったんじゃないのか」

「え、何で分かるの」

「この時期宿屋は金持ちで一杯になるらしいぜ。イープ・・・昨日の赤毛の女が言ってた」

「毎年なんだ」

得心してギヴンは頷く。それで昨日何処の宿の主にも変な顔をされただ。この時期はいつもは荒野にいるから、分からなかった。

「連れてきちゃったものは仕方ねえな。ここに泊まれ」

そう言つてソルは二人に店の奥へ行くよう指示した。それに二人はまた慌てる。

「そ、そんな、そこまでご迷惑おかけできません！」

「そうだよ、雨宿りだけでいいから——」

それぞれに訴えるが、ソルはまたさっきの仏頂面になり、ぼそりといけれど明確に言った。

「ずぶ濡れになつてゐるガキ二人を追いつくほど俺は落ちぶれてねえの」

そのまま二人の背後に回りその小さな背中をぐりぐりと押す。無理矢理二人を店の奥に放り込んで、自分はなんでこういう明らかに面倒そうなのに自ら首突っ込むまねしてんだよと心の中で毒づいて同時に仕方ないよなこれは俺の性分だしとまたソルはため息をついて見せた。

雨はまだ、上がりそうにない。

2 + 仏頂面の陰に微笑み（後書き）

す、進んでな（爆

ここの場面結構長く続くのでここで一旦。

3 + 雨の間の密やかな囁き

開き直ってしまえば気にはならないだろう。この二人の世話は。実のところそのうちの一人とは話してみたいと思っていたし関わることに覚悟を要した。

ある日突然世界からいなくなるかもしれない不安定な存在。いつ消えるとも知れぬ存在、だから。

そう思っただけで決意して事態に踏み入って。後にソルは自分の浅はかさ、に激しく後悔することになる。

この世界はまるで不条理の塊だと。

「ほら、ずぶ濡れのままでと風邪引くぞ。二人とも当然サイズは合わないだろうが、取り敢えずこれに着替えとけ」

「や、いいよこのままで」

「私も大丈夫です」

着替えを渡してもこれだけとはでも言うように頑として譲らなかった。ソルは何か事情があるのかもしれないと納得はしなかったがとにかく二人を着替えさせることは諦めた。代わりにと昨日作り置きしていたシチューを椅子に座らせた二人の前にでんと置く。

「食え」

「・・・あの、なんか命令口調なんですけど？」

「いいから食つとけ」

「・・・ハイ」

仏頂面のぶっきらぼう。目を合わせないし何だか黒いオーラを放っている。

それは単なる照れ隠しで、それが明らかなものだからギヴンとフォートは顔を見合わせてくすりと微笑んだ。

「なんか笑ったか今？」

「いえっ」

「いただきまあす」

振り返ってきたのでぱっと顔を逸らし二人はスプーンを手取る。

一口食べて、

「あ」

「おいしいです」

するりと賞賛の声が上がった。ソルは当たり前だろうと殊更にしかめ面になって二人を一瞥する。

腹を空かせていたことも手伝って二人は黙々とシチューを食べ、その間ひたすら沈黙が続いた。食器の擦れあう無機質なけれど暖かい音が響く。雨の音は相変わらず窓の方から流れ出て、人界に帰って来たのだとギヴンはようやくため息をついた。

「どうした？」

「ん。人だなあつて」

フォートはその言葉に小首を傾げた。だが最近までツバメだったソルは得心して頷き、同時に眉根を寄せた。

「お前、どのくらい荒野にいた？」

「えと」

荒野は人の住む場所ではない。

日差しが容赦なく照りつけ、砂塵が目の端を舞い、魔獣の咆哮が上がる、そこは人にとって死の世界だ。それが一人で渡るのならば尚更。何処まで行っても荒野の世界に長くいると、自分がこの世界に一人きりのような錯覚に陥ることがある。猛獣にいつ襲われるとも知れない恐怖、自分がいて良い世界ではないという疎外感、世界にひとりぼっちのような孤独感は精神を少しずつ侵蝕し、酷いときには発狂することもあるという。

人と触れ合う感覚、人が住む独特の音や気配を思い出せなくなったらそろそろ街に降り立つべきだ。それは精神への負担が大きくなっている証拠だから。

人の間に立って「人だ」と実感するのは、人と触れ合うことを忘れ

かけている証拠だ。この小さなツバメはそんなにも。

「無茶するな」

困惑した少年の頭をソルは帽子の上から撫でる。少年は何故だかそれに嬉しそうに微笑んだ。・・・微笑んだ、のに。ソルにはそれが、まるで泣いているかのように見えた。そんなこと、あるわけがないのに。

3 + 雨の間の密やかな囁き（後書き）

短いつて？そうですね・・・すみません、配分を間違えました。
でもここで場面が分かれてまた会話がずらーっと並ぶので、一旦切ります。

うーむ、連載って難しい（ちゃんと考えて書きなさい）

4 + 少女の強い瞳、幼稚な願い

腹が膨れたら落ち着いたのか疲れが出たのか、少年はその後うつろととし始めてしまい早々にソルにベッドに押し込められた。そういえばあいつ帽子取り忘れてたな、少年が寝付いて今頃になってソルはその事実を何となく思い出した。

「フォート、ナレッヂ。だよな」

テーブルの前には少女がチョコレートの入ったカップを大切そうに両手で包み込んでいた。

少女はふと顔を上げ、申し訳なさそうにまた目を伏せた。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません・・・」

「それはあいつに言っただけでやることだ。ツバメが定住者と深く関わりを持つことなんて余りないんだからな」

「ツバメ・・・」

「ん？聞いてなかったのか」

少女はこくりと頷く。突然現れ、突然助けてくれたのだと言う。それを聞いたソルは苦笑を漏らした。

「漫画じゃないんだから、普通ありえないよな」

「ええ・・・私も迷ったのですが、彼の、目が」

琥珀色の綺麗な瞳。凜として強くて、透き通っていて。

「引き込まれたか。俺と同じ口だな」

「？」

「ツバメをやっているものの癖に、どうしてあんなに透き通った目で居られるんだろう。こういう大きな都市ではそうでもないが、辺境の地ではツバメに関わらず疎ましく思われることが多い。あんな目じゃやっていけないんだがな・・・」

「ソルさんは」

独白するソルにフォートは目を丸くして問いかけた。独白を止め促すソルに首をかしげ、

「彼とそんなに親しくはないのですか？」

「親しいも何も、会ったのは昨日が初めてだぞ」

「・・・ソルさんも彼と同じくらいお人好しだと思います」

「・・・」

ソルは黙するしかない。それくらい自覚している。自覚しているつもりだがー改めて言われると照れくさいのはどうしてだろう。

「とにかくだな。あいつはこの街には直接かわりのない存在だから、だから余計にお前に首を突っ込みやすかったんだろうが・・・」

「そうですね・・・」

「・・・」

二人の間に沈黙が落ちる。それは先ほどまでのような暖かいものではなく、ぎこちない悲しい沈黙だった。

それを破ったのはフォートだった。小さくため息をついて微笑む。

それは諦めと後悔。

「・・・ギヴンさんと、いえ、ギヴンさんに助けていただくべきではなかったのでしょうか」

それにソルは苦笑で返す。

「さてな・・・決めるのはあいつだからな」

「ソルさんにも」

「それも決めるのは俺だな」

「・・・そうですね」

「少なくとも」

ソルは少女の目の前の椅子に腰掛ける。苦笑を強くして。

「俺は嫌ではないぜ？」

その、一言に。少女は目を瞬かせた。元々大きな瞳がなお大きく見える。

「別にお前に何をしてやれるとも思っていない。お前を助けられるとも思わないし、助けようとも思わない。でもお前が助けを求めるなら助けてやりたいと思う」

「どうして・・・」

「お前の、目かな。その目が、気に入った」

この悲しいほどに強い少女の瞳を見て。

心がずとんと、こんなにも簡単に覚悟を決めた。

「・・・いやなのか？」

問い掛けに少女は微笑む。この少女はいつも微笑んでいるな、ソルはふと思う。

手の中のカップを揺らし、しばし逡巡して少女は口を開いた。

「私が自分で決めました」

今目を瞬かせるのはソルだった。

「私が自ら、そうなりたいと望みました。けれど・・・」

「・・・周りの・・・？」

「・・・」

沈黙は肯定。

悲しげに目を伏せて、けれどやはり口元は笑みを造ったまま少女はカップの中身を見詰める。

「この世界が好きです」

やがて顔を上げ、確固たる意志と共に少女は目の前のソルを見る。

強い瞳。引き込まれそうな、それは。

「この世界に生きる人たちが好きです。みんなに幸せでいて欲しい。みんなが幸せじゃないと嫌だ。・・・でも、私のこの願いで悲しむ人がいて」

皆が幸せになれる、そんな世界はないのでしょうか。

あるわけがないと、そんな世界は夢の中だけだと、少女の瞳は強く語っていて。

ソルは唇を噛み締め俯くしかなかった。

切ないほどに強い少女のあまりに無知な問い掛けに、ただ心が抉れて血を流す。

けれど本当に泣いているのはきっと。

4 + 少女の強い瞳、幼稚な願い（後書き）

アップが遅れてすみません；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3865a/>

幸せな死に方

2011年1月3日23時15分発行